

# 教職志望学生に求められる社会的スキルに関するインタビュー調査

葦原 摩耶子\*・前田 小百合\*\*

The interview research about social skills which required for students aspiring to teachers.

Mayako ASHIHARA, Sayuri MAEDA

キーワード：社会的スキル、大学生、コミュニケーション能力

## 序論

近年、子どもや学校を取り巻く環境が様変わりしたことに伴い、教員に求められる資質にも変化が生じている。中央教育審議会（2012）は、これからの教員に求められる資質・能力として、1）教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力、2）専門職としての高度な知識・技能、3）総合的な人間力をあげている。加えて、新任教員に不足している資質として、実践的指導力とともにコミュニケーション能力、およびチーム力を指摘しており、教職を志望する学生が卒業までの間にいかにしてこのような能力を身に付けるかが大きな課題といえる。

他者と円滑にコミュニケーションをとったり、チーム内で適切に行動したりするための能力として、社会的スキルがあげられる。社会的スキルは、対人場面において相手に適切かつ効果的に反応するために用いられる言語的、非言語的な対人行動をさし、近年ではそれらの実行を可能にしている認知的側面や感情の統制も含めた包括的概念とされている（相川、1999）。社会的スキルは、学習の結果として獲得されるものであると考えられている。したがって、社会的スキルを身につけるためには、実際にスキルを求められる対人場面を経

験し、どのようにふるまえば他者と円滑なコミュニケーションをとることができるか学ぶことが必要である。また、求められる社会的スキルは、関わりを持つ相手や所属する集団など、まわりの環境が年齢に応じて変化するたびに変わるため、環境に適応するように学習を繰り返し、年齢に適した新しい社会的スキルを獲得していくことが求められる（大対、2009）。したがって、教職を志望する学生が、教師として求められる社会的スキルを身につけるためには、大学生の年齢で求められる社会的スキルを十分獲得しておくとともに、スクールサポーターや教育実習など学校での対人場面の経験を通して、学校という環境で成人に求められる社会的スキルを養っておくこと、そしてそれらを実際に教師になった際に、教師としての適切な社会的スキルに発展させていくことが重要である。しかし、すべての学生が、卒業までに十分な対人場面の経験を積み、社会的スキルを養うことがきるとは限らない。社会的スキルに偏りや欠如がみられる者に対しては、その不足を補うために対人場面の経験する機会の提供や社会的スキル訓練などのサポートが必要となる。

効果的な社会的スキル訓練を行うためには、相手にどのようなスキルが不足しているかを見極

\* 本学発達教育学部ジュニアスポーツ教育学科

\*\* 本学発達教育学部ジュニアスポーツ教育学科2012年度卒業生

め、そのスキルに応じた訓練を提供する必要がある。つまり、教員が児童・生徒と接したり、他の教職員と共同して学校で生じる課題に取り組む際に、どのような社会的スキルが求められ、その力はどのようにして獲得されたのかが明らかになれば、教員を志望する学生が大学在学中にどのようなことを学び、経験しておくことが重要かを示すことができる。しかし、学校現場で行われている社会的スキルに関する研究は、その対象が児童・生徒であり、子どもにいかにか社会的スキルを身に付けさせるかが主目的となっており、教師自身の社会的スキルを問うものは見られない。従って、本研究は、教育実習後の学生にインタビューを行い、学校現場で教師としてふるまう際に実際にどのような社会的スキルが必要とされたのか、対応に困難さを感じたのはどのような場面か、社会的スキルはどのようにして身に付けたのかを明らかにすることを目的とする。

## 方法

### 1. インタビュー内容選定の手続き

インタビュー内容の選定は、1) 先行研究を踏まえた内容の作成、2) 予備調査による妥当性の確認という2つの手続きを行った。

#### 1) 先行内容を踏まえた内容の作成

先行研究では「教師に必要とされるコミュニケーションスキル」は明らかにされていない。従って、「若者に必要なコミュニケーションスキル」に関する研究結果を元に内容作成を進めた。「若者に必要なコミュニケーションスキル」は、菊池(2007)が作成したKiSS-18を元に作成した。この尺度は、対象者によって、異なる因子構造が報告されており、本研究では、大学生を対象として行われた調査である楠奥(2009)の因子構造を採用した。

第一因子は、「積極的な会話スキル」で、「知らない人とでも、すぐに会話が始められますか」、「初対面の人に、自己紹介が上手にできますか」、「他人が話しているところに、気軽に参加できますか」

などの5つの質問からなる。第二因子は、「ストレスマネジメントスキル」で、「気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか」、「相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか」、「こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか」などの5つの質問からなる。第三因子は、「マネジメントスキル」で、「他人を助けることを、上手にやれますか」、「他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか」の2つの質問からなる。第四因子は、「自己統制スキル」で、「仕事のうえで、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか」、「仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか」、「仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか」などの6つの質問からなる。これらの質問を元に、表現を教育現場に置き換えインタビュー項目を作成した。

## 2) 予備調査による妥当性の確認

### (1) 調査対象者

教職課程を履修している、兵庫県内の女子大生1名(年齢21歳)を調査対象とした。この1名は、小学校教育実習と中学校教育実習(保健体育)を経験している。

### (2) 調査手順

参加者は、司会者1名、調査対象者1名であった。また記録は、ICレコーダーを用いて録音した。インタビューを始める前には、今回のインタビューで質問する内容とデータの取り扱い等についての説明を行い、同意書に記入を求めた。質問は、「積極的な会話スキル」、「ストレスマネジメントスキル」、「マネジメントスキル」、「自己統制スキル」の順番で行った。コミュニケーション相手の年齢に応じて求められるスキルが変化することが考えられるため、小学校教育実習時の経験に絞りインタビューを行った。これらの進行は全て司会者が行い、所要時間は約30分であった。

(3) 分析方法

本調査では、まず、ICレコーダーに録音された内容を文字化する「テープ起こし」を行った。次に得られた発言の内容をパソコン上で適切な長さに断片化（フラグメント化）し、発言の文脈にそった意味を最小限の言葉で補った（エディング）。最後に類似したものをカテゴリーにまとめ、テーマをつける作業（コーディング）を行った。これにより、コミュニケーションスキルが分類された。

(4) 予備調査の結果

インタビュー結果をまとめたものを表1に示す。積極的な会話スキルが求められた場面では、3つの場面が挙げられた。その中でも特に、「授業理解に遅れのみられる児童」や「自閉的な児童」など特に注意して接することが求められる場面で必要となることが示された。必要とされたスキルとしては、「挨拶」や「話しかける」など基本的なスキルが挙げられたが、このような日常の中の小さな積み重ねが重要であるとの回答が得られた。身につけた場面としては、「スクールサポーター」での経験が挙げられた。

ストレスマネジメントスキルが求められた

場面として、喧嘩等で児童が苛立った時に対処をする場合に用いられた。必要とされたスキルとして、児童本人は都合の良いように発言をするため、児童本人に話を聞くのではなく、周りで見ている児童に話を聞くことを大切にするなどが挙げられた。身につけた方法としては、スポーツクラブでのアルバイトでのキャンプ経験が挙げられた。キャンプでは、学校も学年も違う児童が集まるため、喧嘩になりやすい状況にあり、ストレスマネジメントスキルを使用し、上達させる機会となっていた。

マネジメントスキルが求められた場面として、グループワークなど集団で活動させるために児童をまとめる時が挙げられた。必要とされたスキルについては、「指示を出す」というスキルが必要と報告された。身につけた方法としては、指導教員にアドバイスを求めたことや、大学の講義中に模擬授業をしたことが挙げられた。

自己統制スキルが求められた場面として、算数のように児童の内容理解が難しく、授業方法に工夫が必要とされる授業などが挙げられた。授業中に想定していた反応が返ってこ

表1 予備調査で得られた結果

求められた場面	使用したスキル内容	身につけた方法
積極的な会話スキル 児童から想定外の反応が返ってきたとき 授業についてこられない児童に対応するとき 自閉的な児童や学習障害の児童と接するとき	会話を途切れさせない 挨拶をする 話しかける	スクールサポーター
ストレスマネジメントスキル 児童が怒ったり、泣いたりしているとき 児童同士で喧嘩しているとき	児童本人や周りの児童に話を聞く	アルバイトで行ったキャンプ活動
マネジメントスキル 授業でグループワークをしているとき 体育の時間で集団行動をとらせているとき 授業中に遊び出す児童がいたとき	まとめるために指示を出す	模擬授業
自己統制スキル 授業方法での問題点を改善するとき (算数の授業など)	机間指導を行う 授業の反省を行い、説明に変更する	思考錯誤しながら授業作りをしたこと 実際に授業を行ったこと

ない場合は、机間指導しながら授業の改善をしたことが報告された。また、前回の授業の反省を踏まえ、指導教員と相談しながら分かりやすい説明に変更したことが挙げられた。このスキルの身につけ方としては、授業作りをすることが挙げられ、実際に教壇に立つという経験が必要であることが報告された。

以上の結果より、準備したインタビュー内容全てに対して、教師として児童と接するときに必要な場面、スキル、身につけ方が示されたといえる。従って、今回想定した内容が教師の社会的スキルの質問として妥当であることが確認された。しかし、「自己統制スキル」に関しては、コミュニケーションスキルそのものというより、授業や業務をスムーズに進めるためのスキルに関わる回答がみられ、本研究の目的と離れる可能性が考えられる。従って本調査では、コミュニケーションスキルに特に関わりの深い「積極的な会話スキル」、「ストレスマネジメントスキル」、「マネジメントスキル」の3つのスキルに焦点を当てることに決定した。

## 2. 調査対象者

教職課程を履修している、兵庫県内の女子大生3名(平均年齢21.67±.58歳)を調査対象とした。この3名は、小学校教育実習と中学校教育実習(保健体育)を経験している。

## 3. 調査内容

予備調査での結果をもとに、「積極的な会話ス

キル」、「ストレスマネジメントスキル」、「マネジメントスキル」の3つの社会的スキルからなるインタビュー項目を作成した(表2)。コミュニケーション相手の年齢に応じて求められるスキルが変化することが考えられるため、小学校教育実習時の経験に絞りインタビューを行った。

## 4. 調査手順

参加者は、司会者1名、調査対象者3名であった。また記録用にICレコーダーを使って録音した。インタビューを始める前には、今回のインタビューで質問する内容とデータの取り扱い等についての説明を行い、同意書に記入を求めた。質問は、「積極的な会話スキル」、「ストレスマネジメントスキル」、「マネジメントスキル」の順番で行った。これらの進行は全て司会者が行い、所要時間は約1時間30分であった。

## 5. 分析方法

予備調査と同様に、「テープ起こし」、「フラグメント化」、「エディング」、「コーディング」の順に得られたデータを分析した。これにより、コミュニケーションスキルがカテゴリーごとに分類された。

## 結果

### 1. 受け持ち学級の印象

回答がどのような環境で経験された教師としてのコミュニケーションスキルであるか確認するために、受け持ち学級の印象を質問した。その結果、小学校実習では、2名が2年生を担当し、1名が

表2 インタビュー内容

質問1	積極的な会話スキルとは「児童と話していて、あまり会話が途切れない」「知らない児童とでも、すぐに会話が始められる」「児童が話しているところに、気軽に参加できる」などのことです。教育実習でこのようなスキルが求められる場面がありましたか？うまくそのスキルを発揮できましたか？
質問2	ストレスマネジメントスキルとは「児童が怒っているときに、うまくなだめることができるか」「こわさや恐ろしさを感じたときにそれをうまく処理できるか」といったスキルです。教育実習でこのようなスキルを求められたことはありましたか？
質問3	マネジメントスキルとは「児童に上手く指示を与える」「児童を上手に助けたりする」といったスキルです。教育実習でこのようなスキルを求められたことはありましたか？

5年生を担当したとのことだった。2年生の状況として、毎日休み時間は外に遊びに行くなど活発な児童が多く、挨拶などの基本習慣はしっかりできていたという発言が得られた。5年生の状況として、児童が先生という立場を理解しており、全体的に落ち着いていたという発言が得られた。

表3 積極的な会話スキル

《求められた場面》

受け手の場面

- ・児童が積極的に話しかけてきたとき
- ・話を聞いてほしい子がいたとき

話し手の場面

- ・初対面の児童と話すとき
- ・話す機会が少ない児童がいたとき

《使用したスキル内容》

傾聴

- ・「話を聞いてほしい」という児童の気持ちを受け止める
- ・児童の話に耳を傾ける
- ・児童の言葉から次の話題につなげる
- ・クローズドエンドではなくオープンエンド形式で質問する
- ・児童との会話の中で相手の言葉を繰り返し、理解に努める

特性に合わせるためのスキル

- ・学年に合った言葉を使う
- ・児童が関心や興味を持つ話題を見つける
- ・全員と関わられるようになるという目標を持って児童と接する
- ・児童の関心を引くように持ち物を工夫する

態度

- ・自分の物差しだけで児童と接しない
- ・人前で話すことを恥ずかしがらない

《身につけた方法》

学校場面

- ・スクールサポーター
- ・先生方からのアドバイス
- ・大学での講義
- ・スポーツや部活動での経験

社会的場面

- ・障害者支援ボランティア
- ・スポーツクラブでのアルバイト

私生活

- ・兄弟の面倒を見る
- ・教育関係の本を読む
- ・自分のスキルを上げようという心がけ

## 2. 積極的な会話スキル

積極的な会話スキルが求められた場面として、教師が受け手となる場面と、教師が話し手となる場面の2つが挙げられた(表3)。教師が受け手となる場面は「児童が積極的に話しかけてきたとき」などで、教師が話し手となる場面は「話す機会の少ない児童がいたとき」などが挙げられた。「児童が積極的に話してかけてくる」などの場面では、特に傾聴のスキルが求められ、「『話を聞いてほしい』という児童の気持ちを大切にすること」などのスキルが求められたとの発言が得られた。また「話す機会の少ない児童がいたとき」に関しては、「児童の特性に合わせる」ためのスキルが求められ、あまり話をしてこない児童に対して、「その児童が興味関心を持つ話題を見つける」などの工夫をしたとの発言が得られた。身につけた方法として、スクールサポーターなどの学校場面と障害者ボランティアなどの社会的場面、そして兄弟の面倒を見るなどの私生活場面での経験が挙げられた。

## 3. ストレスマネジメントスキル

ストレスマネジメントスキルが求められた場面として挙げられた内容から、イライラしている児童に接するときなど「感情的な児童への対応」と、児童同士で喧嘩をしているときなどの「トラブルの解決」の2つに分類することができた(表4)。使用したスキル内容として、児童の話をよく聴くといった「対応する上での姿勢」と場所を変えるなどの「場の調整」というスキルが挙げられた。身につけた方法として、主にスクールサポーターなどのボランティアや部活動での経験が挙げられた。

## 4. マネジメントスキル

マネジメントスキルが求められた場面として、算数の時間など児童の理解の差が見られる「授業方法に工夫が必要な教科」と、教室以外で授業を行うときや授業中に道具を使用するときなど、特に指示を出さなければならない「特定の条件下で

表4 ストレスマネジメントスキル

---

《求められた場面》  
 感情的な児童への対応  
 イライラしている児童に接するとき  
 泣いている児童がいたとき

トラブルの解決  
 児童同士で喧嘩をしていたとき  
 児童同士で意見の食い違いがあったとき

《使用したスキル内容》  
 場の調整  
 場所を変えるなど落ち着いて話せる環境を作る  
 問題を抱える児童が一人で見つめて  
 じっくり話を聴く機会をもつ

対応する上での姿勢  
 児童の話をよく聞く  
 児童を平等に扱う  
 喧嘩を見ていた児童からも話を聞く

《身につけた方法》  
 学校場面  
 スクールサポーター  
 スポーツや部活動での経験

私生活  
 兄弟の面倒を見る

---

表5 マネジメントスキル

---

《求められた場面》  
 授業方法に工夫が必要な教科  
 ・児童が授業を理解できていないとき(算数の時間など)

特定の条件下での授業場面  
 ・授業中に道具を使用するとき  
 ・体育など教室以外で授業を行うとき

《使用したスキル内容》  
 授業内  
 ・児童の近くに行き行って教える  
 ・具体的に指示を出す  
 ・徹底した指導を行う  
 ・言葉使いに気を配る

授業外  
 ・授業が終わったあとに反省をする  
 ・授業時間外に理解が遅れている児童に対応する

《身につけた方法》  
 学校場面  
 ・スクールサポーター  
 ・先生方からのアドバイス  
 ・スポーツや部活動での経験  
 ・授業

---

の授業場面」が挙げられた(表5)。求められたスキルとして、「児童の近くに行き行って教える」など授業内で使用するスキルと、「授業が終わったあとに反省をする」など授業外で使用するスキルが挙げられた。身につけた方法として、スクールサポーターなどの学校場面で、現場の教師の指示方法を見て学んだという発言が得られた。

**考察**

本研究では、教師の社会的スキルについて、求められる場面、内容、身につけた方法の3点を教育実習経験者にインタビュー調査を行った。その結果、教師の社会的スキルには「積極的な会話スキル」、「ストレスマネジメントスキル」、「マネジメントスキル」の3つが必要とされることが示された。

積極的な会話スキルが求められる場面では、教

師が「受け手になる場面」と「話し手になる場面」の2つが挙げられた。前者は積極的に話しかけてくる児童に対応する時などが、後者は話す機会の少ない児童と接する時などが挙げられ、教師には、性格や特性が異なる児童に柔軟に対応する力が求められることが示された。積極的に話しかけてくる児童に対しては、傾聴のスキルが求められることが分かった。児童の話をしつかりと聴くことで、ラ・ポールが形成され、互いの理解が深まることで新たな話題が広がっていくことが考えられる。また話す機会の少ない児童に対しては、児童の特性を見抜き、一人一人に合わせた話題を提供するスキルが求められており、教師側から積極的に関わりを持つための工夫が重要であることが考えられる。これらのスキルを身につけた方法として、学校場面、社会的場面、私生活場面の3つが挙げられた。学校場面では、スクールサポーターで様々な児童を支援する経験を積むことで、対応の仕方を学んだと考えられる。社会的場面では、

多様な人間関係の中で活動することが、年齢や特性に合わせた話題を掴むスキルを身につけることにつながるといえる。私生活場面では、兄弟など自分自身より下の年齢の子どもを見るという経験から、年齢に合わせた話し方、話題の見つけ方を身につけたのではないかと考えられる。以上のことから、積極的な会話スキルは、様々な場面で他者と関わる機会を多く持つことで育成されるといえる。

ストレスマネジメントスキルが求められる場面では、「感情的な児童への対応」と「トラブルの解決」の2つが挙げられた。前者はイライラしている児童などが挙げられ、後者は児童同士が喧嘩をしているときに挙げられた。イライラしている児童に対しては、場所を変えたり、その児童が一人である時など、落ち着いて話せるよう工夫するスキルが示された。児童同士が喧嘩している時の対応では、児童本人に話を聴くだけでなく、喧嘩を見ていた児童に話を聴くことが重要であることが示された。喧嘩をしている児童らは、自分自身の都合の良いように発言するため、周りの児童に事情を聞き、客観的に判断をするといった対処が求められると考えられる。これらのスキルを身につけた方法として、主に学校場面でのスクールサポーターや部活動の経験などが挙げられた。スクールサポーターを小学校教育実習前に経験し、児童同士の喧嘩の仲裁をする現場の教員の対応を実際に見ることが観察学習となり、スキルの習得につながったと考えられる。部活動での経験では、仲間同士の意見の食い違いなどの集団行動に付随するトラブル経験から、対処法を学ぶことが多かったと思われる。以上のことから、ストレスマネジメントスキルは、現場の教師を見る、自分自身が集団の中で生活をするといった経験を積むことで育成されるといえる。

マネジメントスキルでは、「授業方法に工夫が必要な教科」と「特定の条件下での授業場面」の2つが挙げられた。前者は児童の理解の差が生じやすい授業が挙げられ、後者は教室以外で行う授業において指示をするときに挙げられた。理解の

差が生じやすい授業では、教壇から全体に教えているだけでは、授業についていけない児童を見つけることは難しいという課題が挙げられた。そのため、机間指導を行うなど、理解できていない児童一人一人に指導を行う必要性が示された。また、授業中の机間指導だけでは不十分である場合、休み時間を有効的に使って指導を行うなど、児童の進度に合わせた指導が必要となることも示された。特定の条件下の授業場面では、運動場など教室以外の教場で授業を行う場合の指示の仕方が挙げられた。天候条件も関係してくる屋外の運動場では、風の影響などで、声が児童の耳まで届きにくくなり、指示が通りにくくなることが考えられる。対処として、徹底した指示を心がけることや、授業外で指示の出し方について反省することが挙げられた。指示を徹底しなければ、授業が崩壊することや大きな事故へつながることも考えられ、指示の出し方について授業外で反省することで、次の指導場面で活かせることが考えられる。これらのスキルを身につけた方法として、学校場面が挙げられた。スクールサポーターで、現場の教員の指示の出し方を見ることで、自分自身のスキルへとつないだことが考えられる。また、部活動の中で後輩に指示を出す経験からもスキルの習得につながったことが示された。以上のことから、マネジメントスキルは、現場の教師を見る、指示を与えるなどの経験から育成されるといえる。

本研究の結果、教師に必要なコミュニケーションスキルとして、「積極的な会話スキル」、「ストレスマネジメントスキル」、「マネジメントスキル」の3つとその習得法が明らかになった。スキルごとに、習得法の詳細は異なるが、共通点として、他者を見ることでそのスキルを覚える観察学習と、児童と接する場面に限らず様々な場面で、他者とのコミュニケーションを経験しておくことが重要であることが示された。従って、教員としての社会的スキルを向上させたい者には、教員の指導場面に触れる経験を多く持ち、よく観察することと、場面を問わず、積極的に他者と関わること

が有効である。また、教員養成過程においては、学生のような経験をバックアップする仕組みがあれば、より社会的スキルの高い教員を育成することができる。

教師と同様に他者との高いコミュニケーション能力を求められる職業として、看護師、薬剤師、介護士など医療従事者があげられ、彼らを養成する課程でも、若者にいかにコミュニケーション能力を身に付けさせるかが課題とされている。石光ら（2012）は、看護師養成課程における半年間の臨地実習前後での社会的スキルの変化を検討し、実習を通して身につく社会的スキルと実習を経験しても変化があまり見られないスキルとを報告している。対人関係の中のストレス対処スキルや、業務をこなすための計画のスキルに関しては、実習を経験することで上達していたが、あいさつや相手の気持ちを配慮する、自分の感情をコントロールするなどの基本的なコミュニケーションスキルは実習中に大きな変化が見られなかったのである。このことから、教師としての社会的スキル向上を目的としたプログラムを行う際には、教師としてふるまう際に必要なスキルのなかでも実践の中で向上するスキルとその基盤となるスキルとを区別し、支援プログラムを考案する必要があると考えられる。そのためには、より詳細に教師として求められる社会的スキルを調査し、その能力を測定するための尺度の開発が求められる。その際には、本研究では教育実習後の学生のみのものであったが、現職教員にも対象者を広げ、実践経験の差も考慮してどのような過程で社会的スキルが身についていくのか検討する必要がある。また、プログラムの実施方法としては、知識提供型でなく、参加・実践型プログラムが望ましい。大対（2009）は、社会的スキルが欠如する3つのタイプとして、知識の欠如とともに実行の欠如とセルフモニタリングの欠如を挙げている。つまり、どのような振る舞いが適切か知識を持っているだけでなく、実際にその行動を実行する機会と、実行後にコミュニケーション相手からその行動が適切だったかどうかの正しいフィードバックを受け

ることにより望ましい社会的スキルは身につけて行くのである。そのため、講義形式のプログラムではなく、ロールプレイやワークを用いて、支援プログラム参加者が実際のコミュニケーション場面に近い状況を体験し、スキルを学習できるようにプログラム内容を組み立てる必要がある。

本研究の限界として、限られた対象者での結果であること、児童と教師のコミュニケーションスキルに限られた研究であったことが挙げられる。今後は、教員を目指す幅広い対象者や現職教員で調査を行うこと、教師と教師間、教師と保護者、教師と地域住民など、より多くのコミュニケーション場面を含めて検討していくことが望まれる。

## 引用文献

- 相川充 1999 社会的スキル 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫 心理学事典, 有斐閣 pp.370-371.
- 中央教育審議会 2012 教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について (答申)
- [http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf)
- 石光美美子・古谷剛・林美奈子 2012 看護大学生の半年間にわたる臨地実習前後の社会的スキルの変化 目白大学 健康科学研究, 5, 61-66.
- 菊池章夫 2007 社会的スキルを測る: KiSS-18 ハンドブック, 川島書店
- 楠奥繁則 2009 大学生の進路選択セルフ・エフィカシー研究—KiSS-18からのアプローチ— 対人社会心理学研究, 9, 109-116.
- 大対香奈子 2009 第7章 こどもたちのつながり 金政祐司・大竹恵子 健康とくらしに役立つ心理学, 北樹出版 pp.83-92.